

## 学び合い高め合う子どもの育成

－仲間とのかかわり合いの場における話合いの工夫を通して－

### I 研究の内容

#### 1 研究仮説

仲間とのかかわり合いの場において、「話合い」の工夫をすることにより、互いに学び合い高め合う子どもが育成されるであろう。

#### 2 研究の内容

仲間とのかかわり合いの場における「話合い」の工夫をする。

##### (1) 内容

ア 他と意欲的にかかわり合いながら、学び合い高め合っていくことのできる「話合い」の工夫について

題材や教材及びその学習過程などの工夫／課題提示やグループ編成、形態、話合いのステップなどの工夫／教具やワークシートなどの工夫

イ 仲間とのかかわり合いを意識したり、振り返ったりすることのできる評価について

自己評価や相互評価の工夫

### II 成果と課題

#### 1 他と意欲的にかかわり合いながら、学び合い高め合っていくことのできる「話合い」の工夫について

##### (1) 題材や教材及びその学習過程などの工夫

身近なものや必要性のあるものを題材に設定することで、子どもたちは課題を自分のものとしてとらえ、意欲的に考えを交流することができた。また、学習過程に「話合い」を設けることにより、自分の考えを発信したり、自他の考えと比べたり、よりよい考えに気付いたり、新たな考えを導き出したりと、学習に広がりや深まりが見られた。さらに、仲間と話し合うことのよさについても感じることもできた。

今年度は、それぞれの領域で、よりかかわり合いを意識した題材や教材、その学習過程を考えることにより、「話合い」の工夫が多面的に行われ、様々な場面で子どもたちの学び合い高め合う姿を見ることができた。しかし、「話合い」をどの題材、場面に入れていくか、そのための時間をどう確保していくかが今後の課題である。

##### (2) 課題提示やグループ編成、形態、話合いのステップなどの工夫

具体的なめあてを提示、確認することで、目的意識や見通しをもって主体的に学習

させることができた。課題提示により、課題の意識化、課題に沿ったまとめも効果的に行うことができた。昨年度から活用している「話し合いでつかう力」の提示も、話し手・聞き手のめあての明確化につながり、話し合いのポイントを意識付けることになった。また、教科や内容、課題、発達の段階によって、グループ編成や話し合いの形態を考えていくことで、より主体的な活動につながった。今後もいろいろなパターンを模索していきたいと考えている。

話し合いのステップについては、個からペア、グループ、全体へと拡充していく流れが定着してきた。今年度は、それぞれの段階での細かな支援や新たな段階を模索することもできた。ペアやグループの段階で、話し合いの視点を共通理解させることで焦点を絞った話し合いができたり、相手を意識させることによりその意図を理解しながら聞こうとする「聞く質」の高まりも見られたりした。ペアやグループの話し合いが充実してきたことにより、子どもたちも見通しをもって課題解決にのぞみ、その話し合いにも深まりが見られるようになってきた。また、話型の設定や話し合いの進め方、ルールの定着など、この段階での細かい指導・支援も充実してきたことで、より効果も上がった。さらに、今年度は、グループから全体にいく前にもう一段階導入する実践もあり、全体への効果的な移行という点で有効性が検証された。

### (3) 教具やワークシートなどの工夫

視覚や聴覚に働きかける教具を活用し、その有効性を探った。黒板への板書や掲示物の工夫、ビデオ、デジタル教材の活用を通し、子どもたちの意欲を引き出しながら学習への意識化を図り、より確かな理解へとつなげることができた。

また、スマイルノートやワークシートに自分の考えや根拠を書かせることで、あらかじめ子どもたちの考えを把握し、その後の的確な支援・助言、授業展開に結びつけることができた。スマイルノートやホワイトボードは、発表の際の道具としても使えて、効果的であった。更に、実物投影機や電子黒板を使って個の考えを全体に発表させることで、発表する側は自分の考えをみんなに伝えようという意識が高まり、聞く側は相手の考えを集中して視覚的にとらえることができた。今後は、ICTの活用も含めて、楽しみながら学び合いが深まるような教具やワークシートの工夫を行っていききたい。

## 2 仲間とのかかわり合いを意識したり、振り返ったりすることのできる評価について

### (1) 自己評価や相互評価の工夫

各教科・道徳・特別活動の特性に合わせた評価カードの工夫と活用を行った。視点を明確にした振り返りカードやポートフォリオが作成された。これらのカードにより、学習全体を振り返ったり、自己の変容を見たり、友達のよさや仲間と学ぶことのよさについても感じ取ったりすることができた。また、全体への返し方や教師のコメントの工夫などカードの活用についても考えることができた。

(研究主任 三枝清美)